8 月 1 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　9：　26 – 31

「大胆に」

私たちは神の憐れみを、神の愛を宣べ伝えるために招かれています。しかし、福音を告げ知らせるのは容易なことではありません。時にその働きは、自分の思いとは反対のことを期待されることもあります。「敵を愛する」との教えを地で行くような歩みです。だからヨナはその役割に戸惑い、逃げ出そうとしました(「しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。」ヨナ書 1:3)。

それでも主の恵みは限りなく、ヨナは宣べ伝える道へと一歩を踏み出します(「ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。」ヨナ書 3:3)。ヨナを押し出したのは神の愛です。神は力で強制して働かせられる方ではありません。愛に応えて、自分で一歩を踏み出すのを待っておられます。

聖霊の注ぎを受けて、弟子たちは世界に福音を告げ知らせるべく活動を開始します。しかし、働き手は少なかったので、増やしていただくようにと神に願いました(「そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。』」マタイによる福音書 9:37-38)。そして、サウロが与えられます。ところが、弟子たちは戸惑います。それは、自分の思い通りの働き手ではなかったから。つい先日まで、自分たちの敵だったサウロが、自分たちと同じ働きを託されているなどと、にわかには信じがたかったからでしょう(使徒言行録 9:26)。

しかし、神はあらゆる方法で福音を世界に広げようとされます(「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。」マタイによる福音書 10:7)。あらゆる人を用い、あらゆる思いを用いられます。やる気のある者、力に溢れている者、そして、自分にはそのような力が無いと思い込んでいる者をも用いられるのです。

たとえ自分が歓迎されていようとされていまいと、神に招かれた一人としてパウロは大胆に神の言葉を語り続けました(「しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。」使徒言行録 9:27)。

招かれた私にできることはただ一つ。自信があろうとなかろうと、「全身全霊で恵みを伝えます」と応えることだけです(「しかし主よ、わたしの主よ／わたしは力を奮い起こして進みいで／ひたすら恵みの御業を唱えましょう。」詩編 71:16)。望み通りの結果でなかったとしても、隣人と和解しつつ歩むことだけです。

8 月第 1 日曜は「平和聖日」として過ごしています。和解のプロセス(過程)を共に歩む時、平和のプロセスも維持されます。平和は、恵みを分かち合うという、一人ひとりの不断の努力によって維持されています。だから私たちは今日も大胆に、全身全霊で神の恵みを伝え続けるのです。